

白杵市尾首遺跡の刻目突帯文土器

高橋信武

はじめに

白杵市立南中学校に縄文土器が展示されている。筆者はたまたまその存在を知り、資料紹介の必要を感じたので、後日改めて用具を準備して実測をさせていただいた。また、資料の出土状況等については当時同校に勤務していた立川悌二先生が精しいとのことであった。立川先生にお尋ねしたところ、土器が出土した現地にも案内していただき、以下のような出土状況を伺うことができた。

まず、土器が採集されたのは昭和五〇年頃のことである。当時在校していた男子生徒二名が南津留小学校運動場の上の山で山芋を掘っている際に発見し、穴を掘り広げてこの土器を採集したという。その話を聞き現場に行つて掘り残された破片を回収すると共に、接合作業を行ったとのことである。土器は口縁部を上にした状態で据置かれ、底部はなかったらしい。詳細な出土地点は雑木林となっているために特定できなかった。

以上の実測をし、話を伺ったのは昭和五九年のことである。未発表のまま今日に至ってしまった。当時お世話になった南中学校の校長（当時）村上迅先生、立川悌二先生と関係者の方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

一、尾首遺跡は白杵市の中心部より南西へ約五キロの白杵市大字搔懐にある。豊後水道にそぐ白杵川の兩岸には阿蘇溶結凝灰岩が厚く堆積し、後に開析されてきた台地が連続して残されており、本遺跡もそうした比高差三〇メートルほどの台地

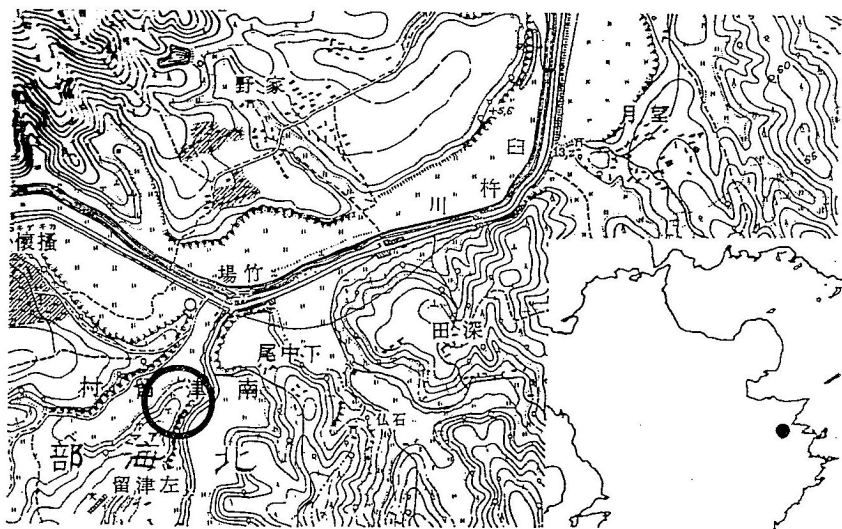


図1 遺跡の位置（国土地理院2.5万分の1）

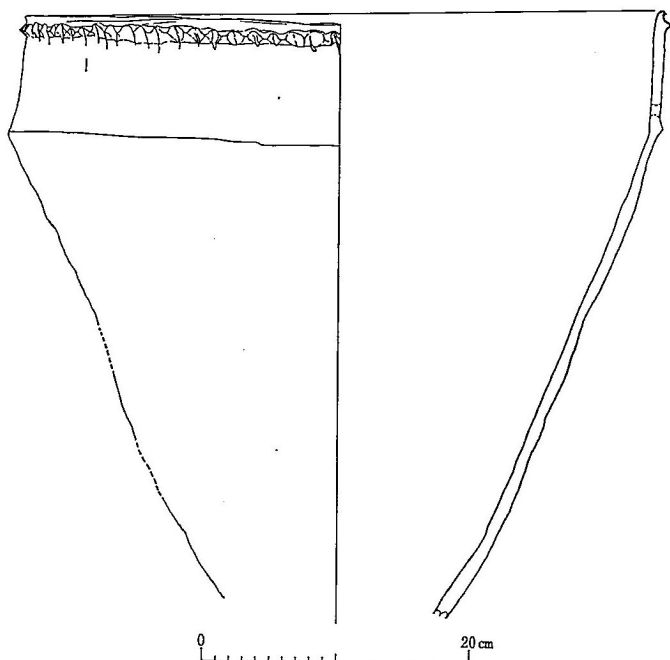


図2 尾首遺跡出土土器実測図

上に立地している。台地は南西部で中広く、北東に向って細まっていて、今回紹介する土器が出土したのは台地北東部の細長い平坦面である。
二、資料（図2・3）は底部が打ち欠かれている他はほぼ完形をな

す。口縁端部の径は四八・〇センチ、胴部との境の径は四九・〇センチである。器面の調整は内外面共に二枚貝の肋縁によってなされていて条痕を認めるが、内面はその後に浅くナデ調整されている。胴部から口縁部へ移る点で「く」字状に屈折しているが、その形状は一樣ではなく口縁部の立上りが直行する部分と外湾気味の部分がみられる。口縁部の上端からやや下がった位置に一条の粘土紐を貼り付け、その後指の先端で刻目を施している。その他、使用痕としてのススが外面に付着している。口縁部には土器がヒビ割れした際の補修孔が二個認められる。

三、この資料はいわゆる縄文時代晩期後葉の土器である。最近ではこの時期の遺跡で水田址が検出され（福岡県板付遺跡・佐賀県葉畑遺跡等）、弥生時代をここまで古く考える見方も強くなっている。大分県内ではこの刻目突帯文土器に代表される時期は大分郡下黒野遺跡の名を冠して

下黒野式と呼ばれているが、⁽¹⁾ 県下で出土する刻目突帯文土器は細かくは次のような二つの形態に分かれている。

その一は、この尾首遺跡や下黒野遺跡にみるような口縁部に一条の刻目突帯文を巡らすものである。これに対して口縁部に一条、胴部との境に一条の計二条の刻目突帯文をもつものがある。⁽²⁾ 坂本嘉弘氏は前者について、次の弥生時代前期の下城式土器の成立にかかわるものであるとの見通しを述べている。今、先の両者の分布図を作製して気づくことは前者は海岸部周辺

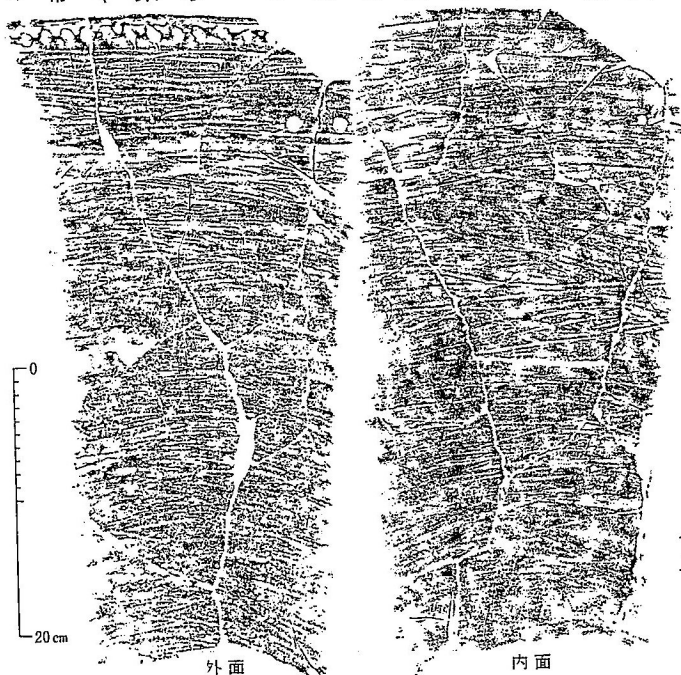


図9 尾首遺跡出土土器拓影

引用文献

- 1、高橋徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化論叢』第12集
- 2、坂本嘉弘「安心院宮ノ原遺跡」安心院町教育委員会 一九八四年

時代初頭の集落址としても興味がもたれる遺跡である。

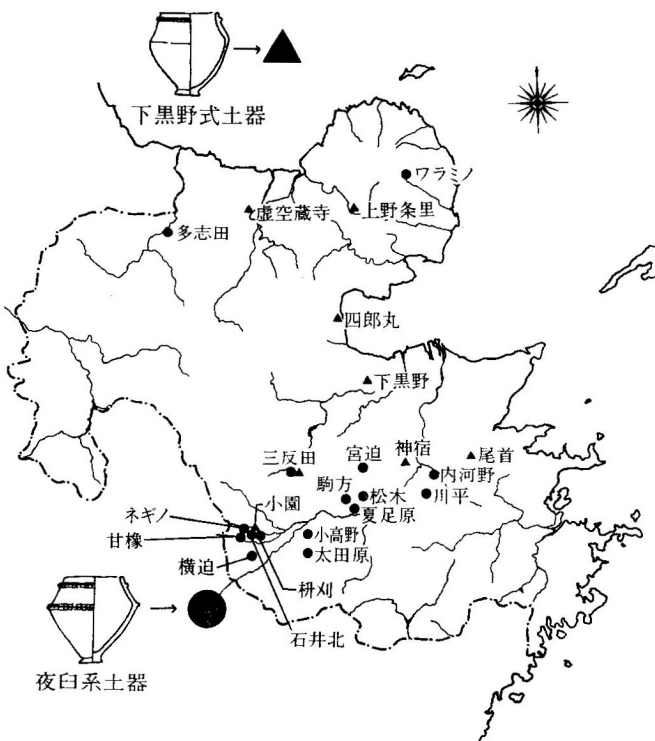


図4 大分県内の刻目突帯文土器出土遺跡の分布図

に、後者は内陸部に分布する傾向を示す点である(図4)。

今回紹介した土器も以上の様相をより明確化するものである。広義の刻目突帯文土器として使われていた下黒野式という型式名は、海寄りに分布する前者の代名詞として狭義に理解しておきたい。

なお、この尾首遺跡の土器は出土状況等からみて死者のための土器棺として転用されたものと考えられる。九州ではこのような葬法は後期後葉(西平式〜三万田式)から現われ、晩期にも引き続き葬法の一つとして行われていたものである。複数で墓域を形成する例もあり、この場合もその可能性は残されており今後とも注意しておきたい。また、居住域との関係や生業等縄文時代末〜弥生

(一九八七・九・二〇)

九州古文化研究会 一九八三年
 (大分県教育庁文化課・)